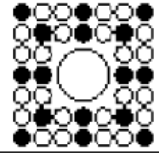


Newsletter of the British Council Japan Association

BCJA Newsletter

No. 24

January 31, 2008



みんなで会を盛り上げましょう
—BCJA 同窓会長就任に際して—

BCJA 会長 齋藤 友博



最初から不景気な話で申し訳ありませんが、BCJA 同窓会の活動は年々下降気味です。総会・懇親会出席者数が減ってきていることに端的に示されています。その大きな理由の一つが、ブリティッシュカウンシル

奨学金が途絶えてしまい、新たな会員が増えないことです。若い新会員を増やすこと、これまでいろいろな理由であまり参加されてこなかった会員の積極的な参加を促すことが求められていると思います。

いろいろ解決策は考えられると思いますが、私は次の3つのことを推進しようと思います。

まず、これまで会員ならびに幹事会の絶大なる支援のもと継続してきた BCJA 奨学金制度の継続です。英国留学予定者に対する毎年 10 人前後の航空運賃程度の少額の奨学金ですが、問い合わせや応募数は決して少なくなく、公的には積極的に広報していないにも関わらず高い関心が寄せられています。これまで、さまざまな分野の優秀な人たちに授与されてきましたが、多くの感謝の言葉が寄せられています。これらの若い方々が BCJA 会員になってくだされば、多いとはいえないものの、毎年会員数は増えることになります。企業やその他の団体への寄付のお願いを引き続き模索しますが、なにより BCJA 会員の皆様からのご寄付がなければ継続は難しい現状にあります。今年もどうか絶大なるご支援をくださいますようお願い申し上げます。

2 番目は、会員間のコミュニケーションの促進と BCJA 活動の広報の促進です。このため、積極的にインターネットの利用と活用を計ります。すでに設けられている BCJA のホームページの更なる活用はもちろんですが、新たに Yahoo! グループの結成と開設をします。後者ではメールによる幹事会から会員への連絡、会員から幹事会への要望、会員間の意見交換、会員相互の連絡等が可能になります。実に便利です。自分からアクセスしなくても登録した自身のメールアドレスへの配信があります。ある程度通信や情

報の保護もされています。このグループへの参加、利用法はこのニューズレターに載せてあります。具体的な質問があれば担当幹事の青柳さんにメールで問い合わせさせていただければお答えいただけます。是非、ご参加ください。

3 番目は非公式な集まりを増やすことです。これまでは唯一と言ってよいほど総会・懇親会が見るべき行事でしたが、年数回、都合がいたらふらっと参加できる機会を設けることです。パブ、居酒屋、喫茶店、レストランなどで、気の向いた時にふらっと参加できる場を設けます。参加費はなく、自身の飲食のみのお店への支払いという形にします。英国流の奢り、奢られも悪くありません。関東以外の地方でも是非そういう機会の言い出しっぺを募りたいと思います。これらの連絡には Yahoo! グループが利用できます。また、総会・懇親会はなるべく英国大使館やブリティッシュカウンシルなどお借りできるように努めたいと思います。それにはできるだけ多くの会員の参加が必要ですので、積極的に参加して下さることをお願いします。懇親会の前小講演なども開催したいと考えています。

以上、任期中に推進したい企画を述べましたが、会員皆様からの忌憚ないご意見、叱咤激励を Yahoo! グループを利用してお寄せくだされば幸いです。

BCJA 同窓会をみんなで盛り上げようではありませんか！

BCJA への一言、そしてもう一言

前 BCJA 会長 西田 宏子



BCJA の会長であるという重圧から解放されました。その間、何故会長の私には何も情報がないのだろうと、一人でぐずぐずしていた時期がありました。それがメールアドレスの変更が出来ていなかったために連絡されていなかったことや、誰がどのように動くのか判らなかったということに原因していたことが、今になってやっと判ったのです。それまでの会長前任者の方々のご苦労を実感しつつ、次期会長がフットワーク良く動ける

ために、また会を継続させてゆくためにいくつかの提言をしたいと思います。

BCJA は、以前はBritish Council との関係が深かったので、British Council の吉田さんのような方が面倒を見て下さっていました。わからないことは、吉田さんに伺う事で、なんとか動いていったように記憶しています。現在では、British Council の援助は無く、会場としても使えなくなりました。そのため、会の中核がどこにあるのか判らないので、一般の会員のかたは、お知り合いに入会希望者がいらしても、どのように登録するのか判らず、引っ越ししたけれど、その住所の変更はどこへ知らせるのかなど判らなくなってしまうのだと思います。

私も名簿の更新は誰がどうするのか、行方不明になった多くの会員をどのように追いかけてゆくのかなど、会の存続に関わる課題に直面しました。気楽に集まって会について相談するための委員へのメールも、なかなか回転してゆかなかったことも問題であると感じました。発信しても、誰からも返事がないまま立ち消えてしまうこともあり、ついに紛れてしまい、そのままになってしまうことが多々ありました。そこで、委員間の集合を呼びかけるメールにどのように答えてゆくのか、期限をきるとか、規定を作って周知しておいた方がよいのではないかと考えています。

今回2007年12月18日の英国大使館内ニューホールに於ける総会は、大使夫人のご好意によって出来たことで、ここに心からの感謝を申し上げます。また、最後の一ヶ月に助けて下さった島津氏の秘書川崎さん、ウェブ上に出して下さった青柳さん、そして会費を決めかねていたときに、一声掛けてくださった島津氏に御礼申し上げます。

総会で講演をして下さった江田五月氏は、白鳥令氏によると BCJA で初めての三権の長になられた方とか。でも関連に楽しく、留学時代のお話や、現在のお仕事についてお話下さいました。秘書の大蔵さん、SPの方にもお世話になりましたが、江田氏もこの総会を楽しんで下さった様子を、氏のメールマガジンに記されておりました。有難うございました。

この総会では、これからを担う若い会員の方にお目にかかれた事が、大きな収穫でした。私達の奨学金という事業がお役に立てた方々からの生の声を聞いた事、そしてこれから会のために力を貸して下さることがわかったことは、頼もしい限りでした。

会員のなかには、この事業への批判的な意見もあることは承知しております。しかしながら、これを続けることで、日英の教育と文化の交流が、目に見える形で継続することが出来るのだと考えます。今日私費で英国へ留学し、さらなる研鑽を積む若い研究者や芸術家が沢山いることは確かです。それだけ豊かな国になったことは喜ばしいのですが、応募書類の審査を通じて、やはりこのように優秀な人々をそのままにしておくことの無いようにすることが、望ましいと考えました。日英を繋ぐ要は、人であることを認識し、それを束ねるための事業がこの BCJA 奨学金であると思います。その意味でも一人でも多くの会員の方から、募金を期待するところです。

もう一つの提案は、皆、誰もが忙しいのはわかりますが、

年一回の総会だけでなく、もう少し集まる機会を作ったほうが良いのではないかと思います。そこで委員だけでなく会員の方々と語る事で、この奨学金事業への協力も得られるのではないかと考えるからです。総会一つでも大変なのに、との声も十分承知しながら、最後に一言申し上げたく思いました。

2007 年度 BCJA 奨学生選考について

BCJA 奨学生選考委員長 平 孝臣

2007 年度 BCJA 奨学生公募に対して、70 余名の応募があり、審査の結果、最終的に6名（選考後に1名辞退となりました。）が選考されました。以下に奨学金授与者のリストを掲載いたします。2007 年度より、審査手続きにおける事務処理の負担を軽減するため、応募書類を CD-ROM による電子ファイルでの提出に変更いたしました。実際の応募に際しては、大きな混乱もなく、数件の応募を除いて、ファイルの読み取りにも問題がありませんでした。次年度以降も同様の応募方法を継続したいと思いますので、ご理解をよろしくお願いたします。なお、2007 年度奨学金の原資については、例年の10名分に達せず、6名分となりました。

2007 年度奨学金授与者リスト

姓	名	留学先研究機関	研究分野	所属／出身校
猪原	登志子	University of Newcastle	Clinical Rheumatology	川崎医科大学、京都大学
美濃部	幸郎	Architectural Association School of Architecture	Emergent Technologies and Design	早稲田大学、東京工業大学
Yoshino	Hiroshi	Liverpool School of Tropical Medicine	Tropical Paediatrics	自治医科大学、長崎大学
黒田	亜希	University of Oxford	Forced Migration	University of Oxford
富塚	太郎	London School of Hygiene and Tropical Medicine	Health Policy	京都府立医科大学

2007 年度 BCJA 年次総会について

2007 年 12 月 18 日に英国大使館ニューホールにて、BCJA 年次総会が開催されました。事務報告を中心とする総会の

後に、参議院議長の江田五月氏より英国留学のエピソードと国会運営についてのご講演をいただき、続いて懇親会となりました。次の写真が参加者全員での記念撮影です。



ピーターハウスでは、戸惑うことも多くありました。しかし今日顧みるならば、政治的にも文化的にも異なる両大学を経験することで、イギリスという国の構造、階級社会といった深層にまで入ることができたのは、駒場の地域文化研究出身者としてはよい経験であったと考えております。

最後にこの場をお借りしまして、留学に際して多くの助言、励ましを頂きました山之内久明先生にお礼申し上げます。また現在の指導教官である東大建築学科の鈴木博之先生にも心より感謝いたしております。

(2001年度BCJA奨学生、University of Cambridge、建築学)

2006年度BCJA 英国留学奨学金授与者からの近況報告[1]

ケンブリッジで学んで — About my Study & Life

宮寺 恵子

2001年度BCJA 英国留学奨学金授与者からの近況報告

イギリス留学をふりかえって

豊口 真衣子

まず始めにイギリス留学の機会を与えて下さった BCJA にお礼申し上げます。私は2003年から2004年にかけてケンブリッジ大学大学院の美術史学科（建築史）に留学しました。私が専攻しております英国建築史研究の泰斗デヴィッド・ワトキン教授に指導いただけたことは名誉なことであり、多くのことを学ばせていただきました。またピーターハウスというケンブリッジ最古のコレッジに所属し、伝統的なコレッジ・ライフを体験するという貴重な機会にも恵まれました。

ワトキン教授は、20世紀前半の英国建築史、デザイン史、美術史を牽引したニコラウス・ペヴスナーの教えを受けましたが、当時のモダニズム全盛期にあつて伝統主義、リージョナリズムの視点にたち、ペヴスナー批判を全面的に展開した研究者であり、なぜ彼がそこまでペヴスナーを批判したのか、といった背景を知る上でも、今回の留学は貴重な体験でした。英国建築史研究者には、ペヴスナー、ジョン・サマーソン、ワトキン教授という大きな流れがあるのですが、その系譜を整理する上でも勉強になりました。

ピーターハウスに話を戻すならば、フォーマル・ディナー、メイボール等をとおして、イギリスの貴族社会を経験できたことは、日本人としては興味深く、貴重な体験でした。しかし、そのようななかで生きることの難しさも同時に痛感しました。ピーターハウスは元々男子校で、学内で最後から2番目ようやく女子学生を受け入れたという経緯があります。学生の大半はイギリス人あるいはコモンウェルスの留学生であり、ユーロ・セントリックな白人男性優位社会において、日本人であり女性である己の「存在」について、深く考えさせられました。

私は2000年にブライトン大学で修士号をとりましたが、ここは労働党の牙城であり、リベラルな雰囲気の中かで研

究生活を送ることができましたが、全く雰囲気の異なるピ

朝9時に一日がはじまり、11時前にはコーヒープレイク。ランチタイムは1時から2時までで、4時には決まってティータイム。5時をまわれば一日の終わり。そのように聞いていた英国の仕事スタイル。それで国がまわるのだろうかと半信半疑で渡英してからはや一年がたちました。実際、多くの方がこのようなスタイルを貫いていました（そして組織は成立していました）が、研究者の一日は、やはりもう少し長いものでした。私自身は、語学のハンディや新たな分野（獣医臨床から分子生物学へ）への挑戦ということもあり、優雅な生活からはほど遠く、研究室にほぼ住み込んで研究している状況です。それでもなお、英国への留学は、私に研究（Study）についてだけでなく、生活面（Life）においても貴重な財産を与えてくれました。



獣医学部の外観（動物病院は建物左手奥に隣接）。建物正面の芝生は、冬の朝には霜で真っ白になる日もあります。春が訪れる頃にはラッパズイセンが一面に咲き誇ります。

About my Study

私は2006年10月より、ケンブリッジ大学獣医学部の博士課程に留学し、動物の遺伝学、とくに犬の遺伝病について研究しています。日本は、米国につぐ世界第2位の犬の飼育数を誇り、こと近年のペットブームによる無理な繁殖の結果、遺伝性疾患が顕在化する傾向にあります。しかし、

獣医遺伝学はまだ新しい分野で、むしろ欧米諸国で研究が進んできました。私が留学しているのは、はやくから犬の遺伝性疾患の原因遺伝子変異の解明に関与してきた研究室で、他の欧州諸国や米国との共同研究によるいくつかのプロジェクトをかかえています。私の研究テーマは、近年、日本で人気犬種となっている、ミニチュア・ダックスフントに失明を引き起こす疾患（進行性網膜萎縮症、ヒトの網膜色素変性症に相当します）に関与する遺伝子の解明です。この疾患は、約 40 年前に英国の研究機関（Animal Health Trust, AHT）にてはじめて臨床的に報告されたもので、2006 年になって、同じく AHT より遺伝子レベルでの研究が報告されました。私は現在、AHT の研究者と共同で、当初の予想よりも複雑であることが分かっていた本疾患の遺伝的背景の理解に取り組んでいます。

私は英国での研究開始に先立ち、日本の臨床獣医師の先生方、飼主およびブリーダーの方々の協力を得て、罹患犬の診断および解析のための DNA サンプルの収集を行いました。現在は、実験室の中で実験機器やチューブの中の DNA サンプルと格闘する日々を送っていますが、日本で出会った、失明というハンディとともに生きる犬たちの明るさや飼主の方々の熱意が、研究を進める原動力となっています。研究は現在も、日本の大学や臨床の先生方との共同というかたちで行っており、将来にわたる日英双方の臨床家および研究者の協力関係の持続に寄与できることを願っています。



博士研究の指導教員（Dr. Sargan、左から二人め）ら研究室の仲間とともに。

About my Life

ケンブリッジでの暮らしでは、あらゆるバックグラウンドを持った実に多様な人々と交流することになりました。ケンブリッジ大学へは世界中から留学生や研究者が集まってきたこともあり、日々の暮らしでは、“英国”だけでなく、“世界”を強く意識させられます。他国からの留学生の友人が増えるにつれ、遠い場所の出来事のように思われていた海外ニュースなども、急に身近なものに感じられるようになってきました。友人らをフラットに招いての日本食会では、出身国のそれぞれ異なる 10 人のゲストが集まり、多様性に富んだにぎやかなひとときとなりました。異なるバックグラウンドや専門分野、意見が混在、共存し、多少のエキセントリシティまでもが許容されてしまう点は、この街について私の好きな点のひとつです。

ケンブリッジでの学生生活にカレッジの存在は欠かせま

せん。私は 31 あるカレッジの中でも比較的新しい Fitzwilliam College（1966 年設立）に所属し、博士課程の 1 年目はカレッジの寮で過ごしました。カレッジ内では、Study では接することのない他の学問分野の学生と交流することができ、たいへん新鮮で刺激的でした。オックスブリッジ特有のフォーマルホール（カレッジのダイニングホールで、ガウンを着用しての晩餐）など、はじめて出会う人に自分や自分の研究を紹介しなければならない機会は多く、またそこから双方の興味を引く話題へ発展させることが求められます。話下手の私は、はじめはなかなか苦労しましたが、それでも少しずつ人とのつながりが広がっていくのを楽しめるようになってきました。そしてまた、どんなに深い専門分野を研究していても、自分の研究内容を専門外の人に興味深く物語れなければ面白くないのだということが分かってきました。



大学院 1 年生の研究経過発表会の前、獣医学部の中庭で同期の大学院生らとともに（筆者は前列右端）。

ことばに関しては、使い慣れない英語による会話に、はじめの数ヶ月は苦労しましたが、実験室の仲間とディスカッションや、学部生への実験指導を通して、少しずつ楽になってきました。

ケンブリッジへの留学は、私の Study の可能性を広げただけでなく、日本にいた頃には想像もできなかった多種多様な Life に接する機会を与えてくれました。この留学を奨励してくださった BCJA の皆様に心より御礼を申し上げます。博士号取得までの残りの 2 年間、多様な Life に触れられる幸運に感謝しつつ、より多くの興味深い Study が達成できるよう、励んでまいります。



研究室の仲間をカレッジのフォーマルホールに招待してのひととき。

(2006年度 BCJA 奨学生、University of Cambridge、獣医学)

2006年度 BCJA 英国留学奨学金授与者からの近況報告[2]

オックスフォード大学で大学について考える

佐藤 万知

2006年よりオックスフォード大学教育学部高等教育学科修士課程に留学をし、現在は同学部博士課程に在籍しています。オックスフォードに到着してからすでに1年3ヶ月。歴史の長く、複雑な構造をもつこの大学についての理解も少しずつ深まってきたように思います。

初めて会う人に‘高等教育学を専攻しています’というと‘将来は先生になるの?’とよく聞かれますが、高等教育学とは高校以降の教育機関、主に大学に関することをさまざまな角度から研究する学問です。例えば高等教育政策、大学教育の質の管理、カリキュラム、国立大学の国における役割、大学の国際化など研究テーマは広く、修士プログラムでもさまざまなことを学びました。私は日本でも最近さかんに聞かれるようになったファカルティーディベロップメント(イギリスでは Professional Development や Staff Development という呼び方をされています)という大学の教職員を対象にしたプロフェッショナルトレーニングと大学教育に関することを研究テーマとしています。主に日本の大学を調査・研究対象としています。研究や実践が進んでいるイギリスやアメリカの大学についても学んでいます。

職業病と同じで、大学について考えることが習慣となり大学ってなんのためにあるのだろう、大学教育はどう変わってきているのだろう、学生はどう学ぶのだろう、学者はどんなアイデンティティーをもっているのだろう、日本の大学とイギリスの大学はなにが違うのだろう、といったことをよく考えます。12・13世紀に建設された建物を現在でも利用し、さまざまな伝統的儀式をいまだに行っているオックスフォード大学にいと現在の大学の在り方について考えると同時に、この大学がどのようにして始まりどのような歴史を経てきたのか、なにが今でも残りなが変わってしまったのかなどとおもいはせることもよくあります。

オックスフォード大学の特に学部生は歴史の作り上げる空気感を感じ取りうけいれることが上手だと思います。例えば本を片手にブレザーを着て革靴の音を鳴らしつつ颯爽と歩いて授業にむかう姿、夜遅くまで図書館に残って勉強に取り組む姿、カレッジでの食事会で正装をして背筋を伸ばして食事をしている姿やシェリーを片手に教授と話をする姿は写真資料でみる12世紀の様子と変わらない光景です。オックスフォード大学に入学するような学部生はいわゆる現代っ子とはずいぶん違うものだと考えてしまうこともあります。おそらく大学の持つ伝統的雰囲気が強いため、気がつかないうちに大学の文化に同化して一定の行動をとるようになるのでしょう。外国に行ったときにその国の文化を吸収していくことと同じことです。そして学生たちはそういう学生像をつくりあげる、時には演じることを楽しんでいるようにおもいます。

そんな風に学生に影響を与える大学の空気感はこれまで

オックスフォード大学で学んできた先輩の功績の積み重ねと大学を形成する建築物によるところが大きいと思います。薄茶色の石でできたゴシック様式の建築物はとにかく巨大で見るものを圧倒し、天空に向かって何本も伸びる先鋭な塔は威圧感すらもち、雨水の落とし口が屋根に施されているガーゴイルというさまざまな表情をした怪物などの頭をした装飾物を下から見上げると、まるで自分の存在の小ささを笑われているようなそんな気分になります。しかし同時に偉大な功績を残したオックスフォード大学の卒業生達も自分が見ているものとほぼ変わらない街の風景を見て、自分が実際に使っている食堂を彼らも使い、自分が勉強する図書館で同じように勉強をし、ひょっとしたら自分が通うパブで議論を交わしていたのかと思うと、自分にもなにかできるのかもしれないという気持ちにもなります。またすでにこの世にはいない卒業生に対して妙な連帯感を抱くこともあります。



John Henry Newman の使用していた眼鏡

個人的な経験としてこんなことがありました。イギリスの大学について語るときに現在でも引用される John Henry Newman という人物がオックスフォード大学の卒業生にいます。彼は19世紀に‘The Idea of a University’ という本を出版し、この本はイギリスで高等教育学を専攻する学生にとって避けることはできないものです。しかし、彼の文章は非常にわかりにくくまた当時学問の中心であった神学とその他の学問の関係について多く語っているためイギリスの歴史や英国教の内容などに関する知識の少ない留学生にとっては非常に理解しにくい本です。2006年10月頃、Newman はいったい何が言いたかったのだろうと頭を悩ませつつ何度も何度もこの本を読み返す日々が続いていました。その日は確か授業がなかったため朝からため息をつきつつ Newman を読んでいました。夜になりそれ以上考えるのは限界に近づいてきたので、一息つこうと散歩に出かけました。誰もいない石畳の道を古い建築物を眺めながら歩きつつ Newman もこんな風景を見ながら大学とはなにかということを考えていたのだろうとぼんやりと考えていると急に19世紀にタイムトリップをしたような気持ちになりました。私はその世界で Newman と一緒に歩きながら彼の語る大学論を聞いているようなそんな錯覚をおこしたのです。その途端に何かが私の中でつながりひょっとしたら Newman はこんなことを言いたかったのではなからうかと思ったのです。おそらくその時私に起こったのは Newman が文章として書かなかった当時の大学を取り巻く雰囲気を

感じ取り、そういった中で大学論について語る場合どうい
うことを考えなければいけなかったのかということを感じ
的に理解したということだと思います。私にとって今でも
特別な記憶として残っている出来事です。

知識豊かな学者陣、豊富な文献、そしてオックスフォ
ードという大学が持つ空気感など刺激にあふれた状況の中
で高等教育学に取り組むことができるのは本当に恵まれて
いると思います。末筆ながら、このような充実した英国留
学生活を奨学金の形で支えてくださった BCJA の皆様に深く
感謝しております。

(2006 年度 BCJA 奨学生、University of Oxford、高等教育学)

2006 年度 BCJA 英国留学奨学金授与者からの近況報告[3]

エジンバラ大学留学レポート

木村 かおり

2003 年の夏に渡英してから、4 年。現在はスコットラ
ンドのエジンバラ大学にて、博士課程の学生として研究生
活を送っております。Moray House School of Education に属
する発達心理学研究グループの一員として、心理学的な観
点から日英の母子関係を比較することがその目的です。私
の調査の対象年齢は 4 歳と 5 歳の子ども達ですが、寝る、お
風呂に入る、ご飯を食べるといった子ども達をとりまく日
常生活の日英間の相違、母親の、子どもの甘えに対する考
え方の比較、また、子どもが母親を必要とする時、それぞ
れの国の子どもがどのように母親にアプローチし、母親が
それに対していかに対応するかといったことを中心に、比
較分析を進めております。

この調査を進める上で必要な、MCAST (Manchester Child
Attachment Story Task) と呼ばれる面接技法を修得する為
に、昨年 4 月マンチェスター大学の精神病理学科で開かれた、3
日間の研修プログラムに参加してまいりました。この面接
技法は 4 歳から 8 歳の子どもの母子愛着形成パターンを分
析するために開発されたものです。研修では、イギリス国
内のみならずヨーロッパ各地から集まった、研究者や臨床
心理士、精神分析家と共に、この面接技法の背景にある理
論を学び、実践的な練習を積み、データを分析する方法論
を学びました。プログラムそのものが大変興味深いもので
あったことは言うまでもありませんが、プログラム終了後、
マンチェスター大学近くのバーで、参加者の皆さんと過
した時間も大変有意義なものでした。この面接技法の開
発者である教授を囲みながら、それぞれの研究のテーマに
ついて話したり、プログラムの中で紹介されたケースにつ
いて、それぞれの専門の立場からざっくばらんに意見をぶ
つけ合ったり。今後の自分の研究やキャリアを考える上でも
大変貴重な経験をさせていただいたと感じております。

BCJA の皆様からいただきました奨学金は、この研修に
参加するための費用に使わせていただきました。皆様から
のご支援なくしては、このような充実した体験はできな
かったであろうと思います。厚く御礼申し上げます。

この研修後、早速日本に一時帰国して日本での調査を始
めました。日本の幼稚園の先生方やお母様方からたくさん
のご協力をいただき、無事に面接や質問紙調査を終了す
ることができました。現在は、イギリスの 6 つの幼稚園に
ご協力をいただいて同様の調査を遂行中です。イギリス
では、これに加えて、幼稚園のボランティアスタッフとして
日々のお仕事をお手伝いしながら、イギリスの幼稚園の
生活の流れを知ったり、こちらの子どもたちがお見送り
に来た保護者どどのようにおかわれの「儀式」をするの
かを観察したりして、様々な切り口から両国の母子関係
を研究させていただきます。

このような研究の傍ら、ここ 2 年ほどは教育学部の学
生のゼミを担当させていただいたり、学生の課題論文の
フィードバックを書く仕事もさせていただいたりするよ
うになりました。渡英して間もないころは、英語で課題
論文を書くことも、英語で自己紹介をすることすらま
まならなかった当時を思い出すと、こちらの学生に、「論
文の書き方とは」というテーマでゼミをしていることが
何とも不思議に思えます。

この学部で勉強をする学生は非常に熱心で、課題論
文の提出日の一週間前からは、私のメールボックスは
学生からの質問のメールであふれ、研究室に質問をし
に訪れる学生も多くいます。彼らの学業に対する真摯
な姿勢を目の当たりにすると、tutor として、少し
でもわかりやすく授業を展開したい、学生の探究心を
刺激するためにどう質問の仕方を工夫できるだろう
かと考えさせられると同時に、一学生として、自分
も負けていられないと研究意欲をかきたてられます。

一学期に 2 回の、学部長を中心に講義やゼミを担
当する 20 名あまりのスタッフが集まって行うスタッ
フミーティングでも、毎回多くの刺激を受けます。講
義やゼミで学生に紹介する論文が、内容の偏りがな
いように慎重に抽出されたり、学生の課題論文の成
績や内容を分析して、今年はいったいメッセージが
学生にうまく伝わらなかったのではないかと反省点
があがったり、それに対応するために後半のゼミの
内容を修正したりと、学部生のコース内容がこんな
にも丁寧に協議され、組織されているのかと驚愕し
つつも、そこから少しでも多くを学ぶべく、奮闘中
です。

私のいる Moray House School of Education で博士課
程に在籍する学生は、世界の様々な国からやってきた、
多種多様なバックグラウンドをもつ学生達です。パ
キスタンの教育省で長年働いていた経験をもつ人、
ボツワナの大学で美術教育の分野で教員をしていた
人、中国の高校で英語の教師をしていた人。そして、
同じ教育学部に属していても、心理学、社会学、統
計学とその分野も様々です。年齢や国籍、バックグ
ラウンドの違う仲間達と、週に 1 度セミナーを開
きます。それぞれの研究内容や分野が違うからこそ、
一つのトピックに関して毎回白熱した議論が繰り広
げられます。心理学的にはこういう面に注目してこ
のような調査方法を用いてアプローチをするけれど、
社会的にはそういう切り方をするのかと参考にな
ったり、研究テーマは違っても、調査方法に
関しては似たような壁にぶつかっているのだな
とお互いを励ましあったり、それぞれの祖国の文化
に触れ

る機会があったり。エジンバラでの留学生活を通してこのような仲間たちに出会えたことは、何よりも尊いと感じています。

最後になりましたが、ご支援をいただきましたBCJAの皆様方に改めてお礼を申し上げます。今後も、イギリスでの研究生生活を通して少しでも成長できるよう、邁進してゆきたいと思っています。

(2006年度BCJA奨学生、University of Edinburgh、教育学)

2006年度BCJA 英国留学奨学金授与者からの近況報告[4]

Oxford 大学ビジネススクールについて

中村 祥子

1. 留学までの経緯

私は2006年9月から2007年9月までOxford 大学にある Said Business School の MBA プログラムに留学しておりました。MBA プログラムというとアメリカのものが有名ですが、イギリスを含めヨーロッパでは1年で集中してとれるプログラムがある点と、学生が世界各国から来ている(私の年は大体40カ国ぐらい、全体で約200人) 点に魅力を感じ、イギリスを選びました。私がOxford への留学を考えたきっかけは、今までの会計士としてのキャリアをふまえてこれからはより国際的な活躍ができるキャリアにチェンジしたかったことと、世界各国からのビジネスパーソンと切磋琢磨して勉強をすることで自分自身をより成長させたいという思いからでした。



2. Oxford 大学 MBA プログラムについて

Oxford 大学では1年は3つの学期からなっています。10月から12月(Michaelmas)、1月から3月(Hilary)、4月から6月(Trinity)と分かれています。最初の学期はMBAの必須科目を勉強しますが2学期目及び3学期目は選択科目も増え、最終的な自分のキャリアゴールに合った科目選択ができます。ビジネススクールは特にグループでの作業が多く、違ったキャリアのバックグラウンドを持った人達とのディスカッションを通じてビジネスに係わる様々な視点を身につけていきます。生徒同士がお互いのビジネスバックグラウンドから学びあっているというのがビジネススクールで最も有意義な経験かもしれません。またOxford 大学特有の

制度であると思ったのは、生徒に対する面倒見のよさでした。Oxford 大学ではビジネススクールと所属するカレッジそれぞれに自分専用のTutorがつき、彼らがビジネススクールでの勉強や生活上の問題点について相談に乗ってくれます。このTutor 制度により安心して学業に励むことができるので、優秀な生徒が育ちやすい環境を作り出しているのではないかと私は考えております。



また、Oxford 大学はCambridge 大学と並びCollege 制度というユニークな制度を持っており、学生は入学すると一つのカレッジに所属します。卒業もそのカレッジを卒業するという形をとっており、カレッジにより住むところや食事が与えられます。したがって、同じ専攻のプログラムを卒業したとしても、生徒それぞれの所属するカレッジを卒業することとなります。



3. イギリスでの留学生活全般

留学生活では学業以外にも有意義な生活ができますが、特に私の印象に残っているのはMBA オリンピックとオックスフォード大学とケンブリッジ大学とのレガッタの対抗試合です。MBA オリンピックとは毎年5月にヨーロッパのMBAの学校が集まって様々なスポーツで競いあう催しで、学業だけでなくスポーツでもさまざまなMBAの学生と触れ合うことができとてもいい経験になりました。またオックスフォード大学とケンブリッジ大学のレガッタは毎年恒例の伝統行事で、両大学のたくさんあるカレッジがボートで競い合う姿は本当に見ごたえがあります。イギリスでは文武両道といいますが、学業だけでなく学業以外の自分の能力を大事に育てている教育をしているという印象を持ちました。今回イギリスに留学して感じたのが、やはりイギリスの良き伝統に基づく教育でした。MBA のよう

な新しく導入されたプログラムを持ちながらも、依然としてイギリスの良さを残しているということ、多くの国々から来た学生達と触れ合うことや Tutor 制度を通して実感することができました。また、学期の合間にはヨーロッパでインターンをしたり、旅行をしたりすることもできましたので、ヨーロッパに近いというイギリスの地理的優位性をあらためて感じることもできました。実際イギリスだけでなくヨーロッパの文化も体験できたことはイギリス留学の醍醐味の一つでもあったと感じております。

最後に、BCJA 奨学金をいただきましたことにつきまして BCJA の皆様に心から感謝を述べたいと思っております。BCJA の奨学生となりましたことは留学中において特に勉強が大変な時期において常に私の心の支えになりました。おかげさまで無事に留学生生活を終えましたことをここに述べさせていただきますと思います。

(2006 年度 BCJA 奨学生、University of Oxford、経営学)

2006 年度 BCJA 英国留学奨学金授与者からの近況報告[5]

英国留学レポート

Taka Miho

英国ウォーリック大学 MPA (Master of Public Administration) 在学中に、BCJA より奨学金を頂くことができ、大変感謝しております。この奨学金は、修士論文執筆の時に、フィールドワーク実施に役立てさせて頂きました。私の修士論文の研究テーマは、自身が留学直前まで NGO (非政府団体) に勤務し、資金繰りの困難さを痛感していたため、NGO のファンドレイジング戦略策定のケーススタディを選びました。フィールドワークでは、英国と日本の NGO のファンドレイジング戦略に関するインタビュー及びオブザベーションを実施し、興味深い結果を得ることができ、オリジナリティのある論文を執筆できました。また、NGO のファンドレイジング活動を振り返り、分析したことで、今後の指針を得ることもできました。

ウォーリック大学の MPA は、1 年間に、Strategy、Leadership and Values in a Democratic Context (民主主義下の戦略とリーダーシップ、価値) と Globalisation and Governance (グローバリゼーションとガバナンス) という二つのコア・モジュールに加えて、Information Management Strategies for Governance and Service Delivery (ガバナンスとサービス提供のための情報管理戦略)、Designing and Managing Networks and Organisations (ネットワークと組織のデザインと管理)、The Political Economy of Public Policy (公共政策の政治経済学)、Managing People and Change (人々と変化の管理)、Research and Evidence Based Policy Learning (研究と証拠に基づく方策学習)、Financial Resource Management (財源管理)、Operations Management and Service Delivery (業務管理とサービス提供) という必須モジュール、更に選択モジュールを 4 つの、計 13 モジュー

ルを履修し、修士論文を執筆するという、非常に集中的なコースです。各モジュールは 1 週間に及ぶ寄宿制で、グループワークを含め朝 9 時から夜 9 時まで実施されます。また、モジュールの成績は 3,000 語のエッセイで評価されるのですが、次のモジュールのための準備のリーディングも必要なので、一つのエッセイに取り組む時間は 2 週間以下しかなく、かなりの集中力が要求されます。英語がネイティブでない私にとっては、リーディングにも執筆にも英国人の同僚よりも時間がかかる上、生後 3 ヶ月の息子を抱えて履修を開始したので、モジュールをこなしていくことで精一杯という状態でした。

選択モジュールは、MBA コースや海外の大学で実施されるモジュールからも選択できるため、私は、MBA から Managing Complexity (複雑性管理) と Project Management (事業管理手法)、国際モジュールから、南アフリカで実施された Comparative Approaches to Governance, Public Management and Social Inclusion in South Africa and the UK (南アフリカと英国におけるガバナンスと公共管理、社会的一体性の比較アプローチ) と Leadership and Ethics for Sustainability (持続可能性のためのリーダーシップと倫理) を履修しました。南アフリカのモジュールが隔年実施であったために、2 年目に履修することになったことは、乳児を育てながらの学業であったことを考えると、有難い結果となりました。

このコースは、MBA と同様に働いている人達を対象としており、平均年齢は高く、40-50 歳でしょうか。また、同期約 35 名のうちの多くが英国の地方自治体や行政機関の職員で、3 年間のパートタイムコースで履修していました。そのため、事例等がやや英国の公共セクターに偏っている傾向があり、外国人学生には分かり辛いところもありました。殆どの学生がパートタイムで履修している中、私を含め 4 人がフルタイムで、国連機関の人や外国からの参加者であったため、意見等の交換だけでなくお互い励まし合うことができ、コースを修了した現在もメールを通して交流が続いています。乳児を抱えての履修で、モジュール中にある食事会等の社交行事には参加出来なかったため、彼らの励ましは大変貴重なものとなりました。

コースを履修中は、エッセイや論文の締め切りに追われてばかりで、振り返る時間や余裕が全く無かったのですが、修了して現在のポジションを開始してみて、このコースから得たことは非常に大きかったと実感しています。まず言えることは、幅広い範囲に及ぶ多数のモジュールを短期間でこなすことで、集中力と時間管理または自己管理の能力が格段に向上しました。そして、修了後に就職活動を開始すると、多くの書類選考を通過することからも、このコースの価値が分かりました。当初希望していたように、また NGO の有給職員となることはできませんでしたが、以前働いていた NGO での活動を継続しながら、英国コベントリー大学の人間の安全保障応用研究所で、有給の博士課程に所属して研究をすることになりました。コンゴ民主共和国における、コルタン採掘と人間の安全保障の関係を研究しています。このポジションを得ることが出来たのも、MPA を履修し、グローバリゼーション下でのグローバル・ガ

バランスや、持続可能性、マネージメント等を含めた、現在の世界が直面する状況への理解を深めたこと、様々なレベルのガバナンスや政策決定に関する視野を広げることが出来たお蔭だと思っています。この視野は、現在の研究を行うにあたって、大きな価値となっています。最後に、改めて、留学を支えて下さった方々に感謝し、奨学金の機会を下さった BCJA にお礼を申し上げたいと思います。

(2006 年度 BCJA 奨学生、University of Warwick、行政学)

2007 年度 BCJA 英国留学奨学金授与者からの近況報告

ニューカッスルでの研究生活を終えるにあたり

猪原 登志子

まず始めに、このたびの留学に際しまして BCJA より奨学金を頂きましたことに改めて御礼申し上げます。

1. 現研究の原点

私が3年間の内科ローテーションを終え、腎臓内科という専門分野に進もうと考えておりましたところ、1995年1月に阪神淡路大震災が起きました。比較的被害の少なかった神戸市西区の西神戸医療センターは震災直後より神戸市の基幹病院として機能を発揮していました。京都大学循環器内科・腎臓高血圧研究室の武曾恵理先生より神戸へ赴任するよう推薦され、1996年より腎臓内科専攻医として3年数ヶ月過ぎました。私の赴任した当時はちょうど震災1年後の復興期ではありましたが、病院の存在する神戸市西区には広大な仮設住宅が広がり、福祉面では不十分な面が目立ちました。腎臓内科外来を訪れる患者さんの特徴としては、特に、高血圧・糖尿病・慢性腎炎などで震災前まで神戸市内の病院で経過観察治療を受けていたのに震災によって治療が中断され、数ヶ月から1年を経て慢性腎不全急性増悪を引き起こし、心不全にまで至る、あるいは緊急透析を必要とするような状態になって腎臓内科外来を受診というケースが目立ちました。夜間の救急外来には家族のケアの少ない仮設住宅在住の高齢者が気管内挿管を要するほどの重症喘息や呼吸不全にまで進行した肺炎で救急車で搬送される例や、震災で家族も仕事もなくして自殺企図を試みる若い方なども目立ちました。

このような状況の中、発熱と呼吸器症状を伴い、急性腎不全・急速進行性糸球体腎炎症候群を呈する腎症が日々の腎臓内科外来、他院からの緊急透析依頼、救急外来の中で非常に多いことに気づきました。これらの患者さんは好中球顆粒内のミエロペルオキシダーゼ(MPO)を対応抗原とする抗好中球細胞質抗体(ANCA)が陽性で、腎生検にて血管炎と診断され、多くの方は急性腎不全、肺出血など重篤な臓器症状を伴っておりました[大西尚、伊藤登志子 et al. 日本呼吸器学会雑誌 1998;36(12):1017-22.]。震災後に発生した症例では腎不全の進行の程度が非常に急速であること、重篤な臓器障害の合併が多いことよりその発症に震災と関連したなんらかの環境因子が疑われました[Yashiro M,

Muso E, Ito T et al. Clin Nephrol. 1999;51(3):190-1]。実際、西神戸医療センターで震災後の1995年から1997年までの3年間に発生した14例のANCA関連血管炎と、京都大学附属病院で1990年から1997年までの8年間に発生した15例について年度別の発生数、臨床症状、転機について比較したところ、神戸群において腎機能低下までの期間がより急速であり、緊急透析を必要とする例が多く、さらに初期症状が上気道症状で始まる例が多く、重篤な肺病変の合併が多かったことがわかりました。また震災で倒壊した建造物の撤去に伴う作業が行われた震災後2年までの発症が最も多く、建築資材に含まれるシリカ等の飛散と吸引が本疾患の発症に関与したのではないかと考えました[Yashiro M, Muso E, Ito-Ihara T et al. Am J Kidney Dis. 2000;35(5):889-95.]。

2. 留学までの経緯

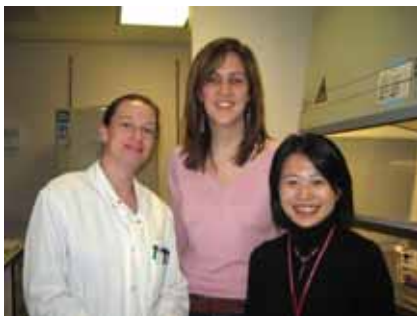
このような臨床での経験を経て、1999年より京都大学大学院医学研究科循環器内科在籍中は ANCA 関連血管炎の病因解明・新規治療法の開発に向けて研究を行うとともに、順天堂大学医学部膠原病内科橋本博史教授班長の日本・欧州間での本疾患の疫学調査班にも加わりました。抗好中球細胞質抗体(ANCA)の対応抗原には大きく分類して好中球顆粒内の蛋白分解酵素であるミエロペルオキシダーゼ(MPO)を対応抗原とする MPO-ANCA と、プロテイナーゼ3を対応抗原とする PR3-ANCA に大別されます。ヨーロッパでは PR3-ANCA が特異的に陽性となるウエゲナー肉芽腫症が多く、日本では逆に MPO-ANCA が陽性となることの多い顕微鏡的多発性血管炎がほとんどですが、全国的な人口統計をもとにした疫学調査はなされておりました。ANCA は1982年に Davies がはじめて報告し、その後 ANCA 関連血管炎という疾患は1980年代後半から1990年代後半にかけて確立してきた概念です。ヨーロッパでは1993年にヨーロッパ血管炎研究班(EUVAS)が発足し、ヨーロッパの国々の国境を越えての共同研究が進められてきました。この EUVAS と日本の研究班との共同研究を行う上で EUVAS 代表のケンブリッジ・アデンプルックス病院のデイビッド・ジェイン先生と知り合い、私自身、京都大学での学位取得後、ANCA 関連血管炎を含む自己免疫疾患の病態解明につながる研究をしたいと相談したところ、ニューカッスル大学リウマチ科 Musculoskeletal Research Group ジョン・アイザックス教授の研究室への留学を薦めていただきました。

3. ニューカッスルでの留学生活

ニューカッスルはロンドンから北へ400km、電車で約3時間の距離にあります。イングランド北部最大の都市で、近年では街全体で科学技術都市を目指し活性化をはかっております。

私が客員研究員として所属いたしましたニューカッスル大学医学部 Musculoskeletal Research Group は、リウマチ科、小児リウマチ科と整形外科の所属する研究者で構成する研究室の総称で、教授8人、honorary clinical academics 11人、研究員10人、博士課程学生18人、リサーチ・ナース6人、テクニシャン6人が在籍する大所帯でありました。

基礎研究部門は大きくテーマごとに4つのグループに分かれており、私はその中の Immunotherapy group (免疫治療班) に属しておりました。私と同僚のヘレンが共同で担当しましたテーマは関節リウマチにおける自己抗原の検索と樹状細胞を介した特異的抗原提示能の検討、生物学的製剤の樹状細胞に与える影響の検討でした。樹状細胞は強力な抗原提示細胞であり、外因性抗原を細胞内に取り込み、CD80, CD86 をはじめとする共刺激分子を高発現することでT細胞を活性化するという抗原提示能力を持つことから、免疫調節に関わる重要な細胞として知られています。研究室内では National Blood Service (UK)より得た白血球濃厚液から末梢血単核球(PBMC)を比重分離法にて分離、その後CD14+抗体を用いてCD14+モノサイトを磁気分離します。さらに Interleukin 4 (IL-4)と Granulocyte macrophage-colony stimulating factor (GM-CSF)で誘導することにより、培養5-6日で樹状細胞が作成されます。抗原提示能の検討には同一ドナーのPBMCよりCD3陽性T細胞をネガティブセレクションにより分離し、また生物学的製剤の樹状細胞に及ぼす影響の検討には別のドナーからのPBMCを用いてCD3陽性細胞を分離し、樹状細胞-T細胞共培養条件を作成し、サイミジン取り込みによるT細胞増殖能、培養上清におけるサイトカイン産生能を検討しました。生物学的製剤の樹状細胞に及ぼす影響については、細胞死と樹状細胞成熟マーカーの発現を検討しました。その結果、生物学的製剤処理を行った成熟樹状細胞は未処理樹状細胞に比較し、早期に細胞死が誘導されること、またT細胞との共培養においてT細胞増殖能が低く、インターフェロン-ガンマの産生が低いこと等が分かりました。現在更に実験を追加しております。



写真は同僚のヘレン、テクニシャンのジュリーと培養室にて。

日本の研究室と比較しまして、教育に力を入れているという印象があり、博士課程学生だけでなく、常に医学部学生、修士学生、海外からの短期の学生の研修にも積極的に、お互い協力し教えあうということが徹底され、常に研究室が活性化されていました。また研究室には専属テクニシャンがおり、研究室を統括しており非常に働きやすい職場であると感じました。

研究室以外の活動としては、前述した日本欧州間のANCA 関連血管炎症候群疫学調査班の研究に関しても継続し、ケンブリッジ、ノルウィッチの共同研究者と論文内容のディスカッションなど、時差を意識せず相談できましたことは大きな収穫であったと思います。メキシコで開催

されました第13回血管炎 ANCA 国際会議に出席しましたところ、ヨーロッパ血管炎研究班に属するバーミンガム大学腎臓内科教授からイギリスに居るのならバーミンガムの研究室を一度見に来ないかと誘っていただきましたので、これまでの神戸での経験からこれまでの研究結果など発表させていただき、大変光栄に思いました。その際、その研究室に所属する研究員、博士課程学生の一人一人がそれぞれ半時間程度の時間割りを組んで、それぞれの研究結果を一对一で発表していただき、それに対して質問させていただくという、大変濃厚な二日間を過ごさせていただきました。イギリスで共同研究の大切さと、人間関係構築の重要性を学んだ気がいたしました。

7歳と3歳の息子をつれての留学生活でしたので、ニューカッスルでの生活で印象に残っておりますのは、子育てとの両立が出来たことです。英国では11歳以下の子供は保護者の監督が必要です。小学校では朝8時50分に学校の門が開くまで子供達は学校に入れません。また、夕方3時15分の下校時間には保護者が学校の前で門が開くのを待たなければいけません。このため、共働きの家庭では、チャイルドマインダーと呼ばれる里親制度を利用します。私達も7歳の小学生の息子にはチャイルドマインダーと契約し、登校前の1時間と下校後の3時間のみをもらいました。保護者の送迎のかわりに、チャイルドマインダーが送迎し、その前後、チャイルドマインダーの自宅で子供達をみてもらうというシステムです。帰国後また、保育所は公立のナーサリーでは保育時間が短いため、私立のナーサリーで、朝8時から夕方5時半までの保育をお願いしました。毎週土曜日には北東イングランド補習授業校(土曜日のみ小学生・中学生のための日本語補習授業校)に通い、保護者どうしも数少ない日本人コミュニティとして助け合うことができました。毎日夕方、子供を迎えに行く時間までに仕事を完了しないといけないという焦りは日本も英国もまったく同じでしたが、こういった日本と若干異なる保育環境を経験できたことも貴重な経験になったと思います。

最後に改めて私を支えてくださった方々に感謝し、帰国後は田附興風会医学研究所北野病院腎臓内科(大阪)にて、自己免疫疾患の臨床研究を通して臨床の現場と研究室とを結びつける役割を担えればと考えております。今後とも御指導御鞭撻を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

(2007年度BCJA 奨学生、University of Newcastle、臨床リウマチ学)

2007年度BCJA 会計決算報告書

2006年11月1日～2007年10月31日

(一般の部)

収入の部

科	目	金	額
	前年度繰越金		1,256,444
会	費		244,000
利	子		58

合 計	1,500,502
-----	-----------

支出の部

科 目	金 額
発送代	52,000
郵便代	1,040
アルバイト代	50,000
オフィス用品代	4,377
印刷代	46,725
合 計	154,142

2007年10月31日現在の資産状況

現金残	1,226,785	次期繰越分	1,346,360
銀行口座残	119,575		

(BCJA 奨学基金の部)

収入の部

科 目	金 額
前年度繰越金	202,608
郵便振込	1,131,000
利 息	60
合 計	1,333,668

支出の部

科 目	金 額
奨学金支給	900,000
振込手数料	2,100
合 計	902,100

2007年10月31日現在の資産状況

現金残	351,000	次期繰越分	431,568
銀行口座残	80,568		

平成20年度BCJA 奨学基金趣意書

平成20年1月20日

BCJA 会長 西田 宏子

BCJA 会員のご好意で、昨年も5名の新進気鋭の留学生が、英国において、勉学にいそしんでおります。大変な難関から選抜された有為な人材であり、必ずや大きな成果が期待できるものと信じております。

今後も、貴重な英国留学の道を確保するため、またこの留学制度に期待している若い諸君に希望を持ち続けていただくため、会員の皆様から、今回も、広くご賛同を賜りたいと願っております。

前回に引き続き、今年度も、より多くの会員の皆様からご賛同を得たいものと、郵便振込でのご送金とします。みなさまからのご厚志を心からお願い申し上げます。

記

一口 5,000 円 二口以上でお願い申し上げます。同封の郵便振込用紙に、振込額、住所、氏名をご記入の上、下記口座宛にお近くの郵便局でお手続きいただければ幸いです。

口座記号番号：00180-0-426794

加入者名：BCJA 奨学基金

事務局 島津幸男 秘書 川崎

〒102-0082 東京都千代田区一番町 3-3

ニッセイビル 9F (株)ビーユー

連絡先 Tel : 03-5211-3855 Fax : 03-5211-3858

e-mail : yukio-s@mvno.co.jp

BCJA の銀行口座のお知らせ

金融機関名：UFJ 銀行

支店名：飯田橋支店 (664) (03) 3268-4131

科目：普通

口座番号：3654677

受取人名：BCJA 島津幸男

要注意!

総会参加費等、BCJA への振込時、ネットバンキングをご利用の会員の皆様には、次の点をご注意下さい。

振込先：ビーシージェイエー (BCJA)

平成19年度BCJA 奨学基金協賛者一覧

2007年10月31日現在

協賛者総数 67名 総額 1,131,000 円
派遣者数 6名 奨学金総額 900,000 円

協賛者氏名 (敬称略 順不同) :

山中 健	肥田野 直	吉田 徹史
諏訪部 仁	矢口 宏	塚原 重雄
中井 農	山下 純宏	西田 宏子
太田 隆英	須田 英明	小鍛冶 繁
桐敷 真次郎	木村 浩	千葉 恵
川本 敏	横山 俊夫	河野 豊弘
久保田 経三	柿内 覺信	山田 和廣
橋都 浩平	西村 閑也	荒木 喬
原川 博善	田口 博國	小堀 巖
菅井 直介	小倉 暢之	島津 幸男
白川 正男	前川 功一	梅川 正美
難波 光義	青柳 昌宏	平岡 公一
北川 正信	石渡 淳一	森田 青平
高井 清	安藤 仁介	井上 公正
宮島 澄子	山田 昭廣	村井 康久
横山 昭	丸尾 孟	関谷 透
河合 秀和	石井 明	児玉 昭太郎

細田 衛士 山下 博 町並 陸生
池浦 貞彦 田中 弥寿雄 岡村 定矩
池上 忠弘 田尾 憲男 木村 清二
木村 守弘 内藤 健二 高柳 和夫
塩田 洋 海老原 遙 中島 章
三井弘整形外科・リウマチクリニック



前回のニューズレターにおいて、ご協賛者の諏訪部 仁様、北川 正信様及び、海老原 遙様の御名前が誤植になっておりました。訂正の上、お詫び申し上げます。

BCJA ホームページについて

ホームページ担当

BCJA のホームページ <http://www.bcja.net/> では、過去のニューズレター閲覧、BCJA 英国留学奨学金、BCJA 活動状況、メンバー向け案内などがご覧になれます。より良いサイトにするため、どうぞ皆さまからのご意見、ご希望をお寄せ下さい。(メールアドレス m-aoyagi@aist.go.jp まで)

Yahoo!グループ[bcja] および[bcja-com]の

ご利用案内

Yahoo!グループ担当

- 1) BCJA 会員の情報交換、情報伝達などに活用していただくために、Yahoo!グループの中に BCJA 会員専用グループとして、[bcja]グループを新規に設定いたしました。既にメンバー登録を開始しております。登録を希望される方は、下記の URL にアクセスして下さい。

<http://groups.yahoo.co.jp/group/bcja>

電子メールのアドレスをお持ちでない方、また、個人、会社のアドレスでは何かと不便な方は、yahoo の電子メールアドレス (旅先などで借り物の PC から簡単にアクセスできます) が新たに取得できますので、そのアドレスをお使い下さい。

- 2) BCJA 運営委員専用グループ [bcja-com]も設定しましたので、こちらも委員同士の情報交換にご利用下さい。URL は下記です。

<http://groups.yahoo.co.jp/group/bcja-com>

[編集後記]

BCJA ニューズレター24号では、BCJA 英国留学奨学金 2007 年度選考結果報告、2001 年度、2006 年度、2007 年度 BCJA 英国留学奨学金授与者からの近況報告 7 件、会計報告などを掲載することができました。原稿をお寄せいただいた方々に大変感謝いたします。

編集部では、本レターへの寄稿を募集しております。皆様の研究・事業活動のご紹介、英国との交流事例、最新の英国事情、留学体験談など、よろしくご投稿をお願いいたします。一度、原稿をお送りいただきました方々にも、続報をぜひよろしくお願いいたします。また、特集テーマ、原稿依頼の案、紙面構成、編集方針などのご意見も積極的にお寄せいただければ幸いです。

編集作業をお手伝いいただけるボランティアの方を募集しておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。なお、本レター発送については、会計担当の島津様、川崎様にご協力いただきました。この場を借りて、心より感謝いたします。

(青柳昌宏、独立行政法人 産業技術総合研究所、National Physical Laboratory 1994-95, m-aoyagi@aist.go.jp)

